

フードビジネス学科フレッシュマンセミナー・基礎演習 田んぼアート作成による地域との交流

Report on Seminars for Freshmen and Sophomores in the Food Business Department: Regional Exchange through Rice Paddy Art

田中 明子, 國友 宏渉, 山本 和子
Akiko TANAKA, Hirotada KUNITOMO, Kazuko YAMAMOTO

この報告は、平成19年度にフードビジネス学科のフレッシュマンセミナーおよび基礎演習の学生が取り組んだ田んぼアート作成の記録である。平成18年度の基礎演習において行われたオリジナルカレーメニュー作成プロジェクト同様、学生が食の出発点である生産の段階から商品化、販売にいたる食の流通過程を学習する機会として、この田んぼアート作成も社団法人稲沢青年会議所との協同事業として企画された。案山子作りに始まり、田植や稲刈り、糯米メニューの開発・販売にいたるまでの作業を稲沢で様々な仕事に携わる人々と共に行ったことは、卒業後フードビジネスの世界で活躍することを希望する学生にとって貴重な経験であった。本稿では、学生が行った毎月の作業とその成果を報告する。

In this paper, we will report the activities in which the seminars of 2007 for freshmen and sophomores in the Food Business Department created paddy-field art. As in the activities carried out in 2006, we collaborated with the Inazawa Junior Chamber in planning this educational work, as we believed that it was a valuable experience for the students to participate in the project with many working people in Inazawa. In the seminars, the students set up a scarecrow, planted and reaped rice, and developed new dishes using glutinous rice. It was a good opportunity for students who are aiming to get jobs in the food business industry to be involved in the food business from production to sales.

キーワード：フードビジネス学科，フレッシュマンセミナー，基礎演習，田んぼアート，
地域との交流

Food Business Department, freshman seminar, seminar for sophomores, paddy field art,
regional exchange

1. はじめに

名古屋文理大学のある稲沢市は愛知県北西部，濃尾平野の中央部に位置する。植木の産地として有名なこの地には野菜畑や水田も多く，愛知県内で最も多く栽培されている「あいちのかおりSBL」の主な生産地

の一つでもある。このような土地に所在する大学の学科として，平成19年度のフードビジネス学科では，フレッシュマンセミナーおよび基礎演習の学生が，稲沢市青年会議所との協同事業である田んぼアート作成プロジェクト「まいマイ稲沢」に取り組んだ。

近年、多くの市町村が地域の活性化を図る事業の一つとして位置づけている田んぼアートは、水田に色の異なる米を植えることによって巨大な絵を作ることがその魅力である。フードビジネス学科の学生が参加した「まいマイ稲沢」プロジェクトでも、古代米と呼ばれる赤米、黒米、緑米の3種を利用し、2反の水田に巨大なカタツムリを描くこととなった。使用した水田は稲沢市船橋町の稲沢市消防署本部近くの水田である。また、田んぼアートのデザイン「マイマイ」は、稲沢市出身の洋画家・荻須高德（1901年-1986年）の代表作の一つである「金のかたつむり」（1978年）（稲沢市荻須記念美術館蔵）にちなみ、原画が作図された。

稲沢青年会議所メンバーによる事前準備の後、平成19年4月から始まったフードビジネス学科フレッシュマンセミナーと基礎演習で学生が行った活動は表1の通りである。

本稿では、第2節でこれらの作業の概要を報告し、第3節で1年間の活動の成果を述べる。

2. 田んぼアート作成事業「まいマイ稲沢」

2.1. 生産農家見学

4月の基礎演習およびフレッシュマンセミナーでは、前年度に実施した「地産地消のカレーづくり」活動の概要を学生に説明することにより、稲沢市で仕事をする人々と稲沢市で学ぶ学生たちが、稲沢のまち起こしのために共に活動することの意義を考え、また1年間におよぶ活動の心構えをすることを促した。

4月21日に名古屋文理大学瀧川記念体育館1階ラウンジで行われた第1回まちづくり事業では、開始当初は硬い表情だった学生たちも、青年会議所メンバーによるアイスブレイキングにより、すっかり打ち解けた表

情となり、これから1年間、共に活動する「仲間」との時間を楽しむことができた様子である。この日は午前中、青年会議所メンバーから田んぼアート事業「まいマイ稲沢」の概要が報告され、その後、青年会議所メンバーと学生の混合グループが作られ、水田にたてる案山子のデザインを出し合う作業が行われた。5月から10月まで田んぼを守ることになる案山子のデザインとして、かわいらしいキャラクターから恐ろしい鬼の顔まで様々な案が出され、ディスカッションは和やかに進んだ。



案山子をデザインする学生

また、この日の午後からは田んぼアートのキャンパスとなる水田の見学に出かけた。水田では生産農家の方々から、水田やそこで使われる機械の説明、収穫後に使われる設備の説明を受けた。稲沢市で学びながら、これまで市内の水田を見る機会がなかった学生も多く、水田の広さや設備の規模の大きさに驚いている様子であった。また、見学の最後には実際に田んぼアートに使われる赤米、黒米、緑米の苗を観察し、色の微妙な違いを確認した。

表1. 平成19年度フードビジネス学科「田んぼアート」年間活動表

月日	活動	内容
4月上旬	演習内活動	田んぼアート事前学習
4月21日	第1回まちづくり事業	案山子のデザイン, 水田見学, 農家見学
5月19日	第2回まちづくり事業	田植え
6月17日	第3回まちづくり事業	御田植祭参加, 精米所見学
7月~9月	演習内活動	田んぼアート見学
10月13日	第4回まちづくり事業	稲刈り
10月27日~28日	稲友祭(学園祭)	餅搗き, 糯米メニュー販売, ポスター発表
11月3日	第5回まちづくり事業	国分小学校創立記念行事参加
11月9日	稲沢青年会議所例会	活動報告
12月~1月	演習内活動	田んぼアートまとめ



苗の色を観察する学生

2.2. 田植え

たんぼアートのための田植えには様々な方法が用いられるが、「まいマイ稲沢」プロジェクトでは、杭とロープを用いた田植えが行われることになった。2反の水田に描かれる巨大カタツムリの設計図は8区画に分けられ、1つの区画はさらに50ものブロックに分けられている。これに基づき水田の両端には田植えの前後の間隔を決める杭が打たれ、両端の杭を結ぶロープには稲を植える左右の間隔を示した番号札がつけられた。5月の演習時には、設計図の見方や実際の田植え作業の手順を担当教員が説明した。

これらの事前準備を経て、第2回まちづくり事業となる田植えが5月13日に行われた。晴天となったこの日は、午前8時半に水田に集合の後、稲沢青年会議所メンバーより田植え作業の手順が説明され、その後、青年会議所メンバー、地元の小学生、そして名古屋文理大学フードビジネス学科の学生が8班に分れ、田植えを開始した。水田に初めて入る学生も多く、裸足で水田に入った学生からは最初こそ驚きの悲鳴も聞かれたが、次第に水田の感触にも慣れ、自分の持ち場へ向かって行った。

各班のリーダーにもフードビジネス学科の学生が選ばれた。リーダーは総指揮を務める稲沢青年会議所メンバーの号令に合わせて、自分の班の仲間に植える苗の色を指示する。リーダーから指示を受けた者は、自分の前のロープにつけられた札の番号を確認しながら、間違いのないよう、指定された色の稲を植えていく。田植えが初めてという学生にとっては、水田の中を移動しながら稲を植えることはもとより、一箇所に植える稲の本数や、その本数を取り分けることにも困難を覚える様子であり、最初の休憩時間にはすでにかなり疲労を感じている学生もいた。しかし、時間が経つにつれ、晴天下涼風そよぐ水田での作業は順調に進

むようになり、昼食休憩をはさんだ後、午後の早い時間に全ての稲を植え終えることができた。学生からは裸足で入る水田が心地よかった等、活動を楽しんだ様子がうかがえる感想が寄せられた。



田植えをする学生

2.3. 御田植祭

国府宮神社の呼び名で親しまれる尾張大國霊神社では、毎年6月第4日曜日に御田植え祭が斎行される。平成19年の御田植祭はあいにくの雨降りとなったが、午前10時の開始前から、国府宮神社には多くの人が訪れていた。

例年同様、この日も10時から御本殿で祭典が斎行され、引き続き御神田では田植え歌に合わせて早乙女たちが田植えを行った。朝からの雨はこの頃には大雨となってしまうていたが、学生たちは興味深そうに田植えを見守っていた。国府宮神社の名前は知っているも訪れる機会のなかった学生たちにとっては、境内に入ったこと自体も良い体験であったようである。



御田植祭祭典の様子

体育館ラウンジに戻り昼食休憩をとった後、雨が上がった午後は精米所の見学に出かけた。学生たちは収穫した米が販売されるまでに経る精米の過程を学び、また、精米所で使われている様々な機械の用途の説明

に熱心に聞き入っていた。5月の田植えを経験し、米作りの大変さを実感した学生たちは、収穫後の米にも多くの手間が必要なことを知り、さらに米作りの奥深さを感じた様子であった。



早乙女による田植

2.4. 田んぼアート見学

田植え後の水田の世話は稲沢青年会議所メンバーの活動として予定されていたため、まちづくり事業の行われないうち7月から10月初旬までの期間は、フレッシュマンセミナーおよび基礎演習の活動として、糯米メニューの開発や古代米に関するポスター発表の準備を行うとともに、稲沢市消防本部の訓練棟から田んぼアートを見学する機会を設けた。訓練棟から見下ろす田んぼアートは、7月には緑のキャンパスに黒米がカタツムリの輪郭を描いていたのみだったが、10月初旬には赤米も色づき、かわいらしいマイマイが水田に浮かびあがっていた。ヘルメットをかぶり訓練棟に上がったものの、腰に安全のためのベルトをつけて下をのぞきこむことにしり込みする学生も見られたが、見事なカタツムリの姿に歓声が上がった見学であった。



7月の田んぼアート

2.5. 稲刈り

訓練棟からの見学の際には刈るのが惜しいと言う学



10月の田んぼアート

生もいたほど見事な田んぼアートも、10月13日の第4回まちづくり事業の日、刈り取られることとなった。秋晴れのこの日、午前8時半に田んぼに集合したフードビジネス学科の学生は、用意された鎌を手に、稲沢青年会議所メンバーとともに田んぼに入った。田んぼアートに使用した赤米、黒米、緑米はそれぞれ調理方法が異なるため、混ぜることなく丁寧に刈り取らなくてはならない。背高く育った稲の根元をつかみ、鎌で刈り、紐で縛り、トラックへ運ぶ。この作業の繰り返しに学生たちも疲労困憊であった。昼食休憩を挟んでもまだ作業は長く続き、やっと稲刈りが終わっても、次には落穂を拾う作業が残っている。すべての作業が終わり田んぼから上がったとき、田植えとは比べ物にならないほど大変な稲刈り作業を朝から夕方まで続けた学生たちからは、機械のなかった時代の農家の厳しい作業を思う言葉も出ていた。



稲刈り

2.6. 糯米メニューの開発と試作

収穫した糯米が精米されフードビジネス学科に届けられると、すぐに名古屋文理大学の学園祭である稲友祭の日を迎えることとなった。夏休み明けから学生が準備していた古代米レシピの中から、学園祭で学内外の人々に試食していただくためのメニューとして、黄粉と餡子と胡麻の団子と、黄粉と餡子と大根おろしの餅が選ばれた。また、学生の親戚の方から糯米の扱い方や餅搗きの作法までを見せていただく機会を得ることもできた。

学園祭前日には、学生たちによって会場となる体育館ラウンジにポスター発表用のポスターが貼られ、また餅搗き用具や調理のための用具の準備、糯米の仕込みも行われた。演習担当教員とともに糯米の調理方法の確認も行った。

学園祭当日は朝9時に集合し、まず糯米を水から上げ、30分後に蒸し始めた。そして、キャンパスに市民客も増えた昼前から午後にかけて、両日とも5臼ずつの餅を搗いた。餅を搗くことや餅を反すこと、搗きたての餅をちぎって調理することさえも経験したことがなかった学生にとっては、学園祭での作業も貴重な体験となったようである。餅が搗きあがったことをアナウンスするたびにラウンジ前にできる長蛇の列にてんでこ舞いをしながらも、てきぱきと餅を調理して学内外の客に振舞っていた。



糯米メニューの試作品

餅搗き用具の後片付けも学生にとっては予想外に骨の折れる作業だったようであるが、自分たちの作った米による糯米メニューの人気の高さが嬉しかった様子で、来年は販売をとの声も上がった。

2.7. 地元小学校創立記念行事への参加

学園祭の翌週11月3日には、最後の協同事業となる第5回まちづくり事業が行われた。当初は収穫祭への参加が予定されていたが、計画が変更され、地元の稲沢市立国分小学校の創立記念行事に参加することとなった。田んぼアートから収穫した糯米による餅搗きや搗きたての餅の調理などを学園祭で経験済みの学生は、この日の行事でも十分に力を発揮し、小学生や地元のお年寄り、そして稲沢青年会議所メンバーとともに楽しい時間を過ごした。



創立記念日で餅を搗く学生

2.8. 活動報告

稲沢市立国分小学校の創立記念行事への参加をもって、平成19年度に予定されていた稲沢青年会議所との協同事業はすべて終了したが、これらの活動の総括として、11月9日、フードビジネス学科の学生が稲沢青年会議所の11月例会に参加し、活動報告を行った。

フードビジネス学科の1年生や2年生には少人数の演習や授業以外の場所で口頭発表を行う機会がなかったため、発表を担当することになった学生たちは社会人の会合で発表を行うことにはかなりの重圧を感じたようであるが、これまでの活動を記録した写真をふんだんに使用したパワーポイント資料を作成し、4人の学生が分担して発表するための原稿を用意して、担当教員とともに会場となる稲沢商工会議所へ向かった。

入室時には稲沢青年会議所例会の雰囲気や圧倒されている様子もうかがえたが、発表が始まると、共に田んぼアートを体験したまちづくり事業のメンバーのリードもあり、会場から笑いとるほどに余裕のある楽しいプレゼンテーションを行うことができた。発表後にはグループディスカッションにも参加し、まちづくりという大きな枠の中での田んぼアートの意義を振り返る機会を持つこともできた。



青年会議所例会に参加する学生

2.9. まとめ作業

以上をもって田んぼアートに関わる活動は無事終了したが、12月から1月にかけてのフレッシュマンセミナーおよび基礎演習の時間にも、まちづくり事業の写真を見ながら活動を振り返り、田植えから調理までの過程について、学生が自由に感想を述べる機会を設けた。自分たちが体験した作業の大変さはもちろんのこと、自分たちは参加しなかった田んぼの世話等の話題や、米作りや古代米に関する話題も長らく演習を賑わした。フレッシュマンセミナーではA5用紙1枚程度に感想文を書く作業、また基礎演習ではA4用紙2枚程度に活動を内容ごとにまとめる作業をおこない、平成19年度田んぼアート活動のまとめとした。

3. おわりに

平成19年度のまちづくり事業には、前年度の活動の反省も生かし、稲沢青年会議所メンバーと演習担当教員が事前に予定を十分に確認した上で、積極的な参加を学生に促した。また、参加する学生が活動の意義をしっかりと理解し、自分の役割を果たすことができるよう、各活動の前後の演習時間を利用して作業の概要説明や活動を振り返る機会を作った。活動に参加した学生の行動を見ていると、青年会議所メンバーと演習担当教員の思いは十分に通じていたのではないかと思われる。とはいえ、忙しい昨今の大学生にとっては、年に数回のことではあっても、授業のない土曜日や日曜日に大学やその周辺で活動をする時間を作り、授業時間以外を田んぼアート関連の作業に当てることは非常に難しいことであったようである。田植えや稲刈りという作業の魅力や稲沢市で働く社会人である青年会

議所メンバーと親睦を深めることの大切さをわかっていながらも、すべての活動に参加することのできた学生はほとんどいなかったというのが実際であった。しかし、すべての活動に参加することができなかったとしても、一つ一つの活動は学生にとってこの機会を逃しては得ることのできない貴重な体験であったことは間違いなく、演習の仲間から聞く活動の報告は、田んぼアートについて担当教員から習ったり本から学んだりした内容とは一味も二味も違ったものであったはずである。今後学生たちがフードビジネス学科で学んでいく過程で、この「まいマイ稲沢」プロジェクトに参加したこと、そこで得た力が自信となることを担当者一同、確信している。

さて、平成19年度に美しく浮かび上がった名古屋文理大学フードビジネス学科と稲沢青年会議所による稲沢の田んぼアートは、平成20年度、稲沢市市制50周年記念事業「Welcaru Inazawa ～植える刈る稲沢～」として新しいスタートを切っている。今後もフードビジネス学科の学生が、この事業を通して、フードビジネスについて深く学び、自分で計画し実行する力や、仲間と協調して行動する力を身につけて行くことを祈って本稿のまとめとしたい。

最後に、平成19年度もフードビジネス学科の学生にこのような素晴らしい学びの機会を与えてくださり、なかなか自分からは行動を起こせなかった学生たちを親身に指導してくださった稲沢青年会議所の皆様に、この場を借りて深く御礼申し上げたい。